短大における親子サロンの創設と持続可能な取り組みの模索

Establishment of Parent-Child Salon in Asahikawa Junior College and Search for its Sustainability

佐々木　千　夏
Chinatsu SASAKI

旭川大学短期大学部

Abstract

This paper is a report on the preparation and management of a parent-child salon in Asahikawa Junior College. Seminar Sasaki has been working on the concept of a parent-child salon since 2018, and opened the first salon in November 2019. First, I will write about how I decided to start a parent-child salon, and explain my preparations for the previous year. Next, the contents of the parent-child salon, that is, the characteristics of the participants, the composition of the childcare environment, and the appearance and changes of mothers are described. And, based on an episode record, I present examples of students learning a lot about child-rearing families and the stages of child development. Finally, I will discuss future issues and next year's activities.

０．はじめに

本稿では、旭川大学短期大学部の校舎において、ゼミナール活動ならびに地域の子育て支援の一つを目的とした「親子サロン」を開催するに至るまでの状況に関して、これまでの活動の歩みを報告する。

本学短期大学部では、すべての学科が少人数制のゼミナールを編成し、学生たちは入学から卒業時までの２年間、一つのゼミに所属し、ゼミ担当教員の研究や問題関心に沿った内容で構成されるそれぞれの活動を行っている（演習Ⅰ・Ⅱとして卒業必修単位として履修）。幼児教育学科佐々木ゼミナールでは、2018 年より短大校舎にて地域の子育て家庭に開かれた親子サロン（以下、短大サロン）の開催を構想し、2019 年度より実際に活動を開始した。以下では、短大サロンの着想に至った経緯（→１）、前年度を中心とした準備状況（→２）、短大サロンの実際（→３）、短大サロンの中での学生の学び（→４）、現時点での課題と次年度の取り組みに向けて（→５）という順で、経過および現状の報告をする。なお、本活動は、2019 年度北海道社会福祉総合基金の助成を受けて成立しており、２年間（2021 年３月まで）の事業計画に基づき実施している。本稿はその第一報告となるものであり、次年度に第二報告を予定している。

１．短大サロン着想の経緯

筆者は 2015 年と 2017 年に出産し、二度の育児休暇（合計１年８か月）の間、夫の勤務地であった九州・X県にて過ごした。滞在中、居住地付近の CO・OP（生協コープ）にて月に１回開かれていた「子育てひろば」（以下、ひろば）に参加してきた[1]。短大サロンは、このひろばへの参加経験から多くの着想を得ている。

ひろばが行われるのは生協の事務所等が含まれるビルの一室であり、１階はスーパー、２階は別のテナント、そして入り口を別にした３階にある集会室がその会場となっていた。室内は奥側がクッション・マットや大判のタオルケッ

トを何枚か合わせて敷ける広いスペースとなっており（図１）、入り口付近の水道の近くに、長テーブルを４つロの字型に置き、パイプ椅子やお茶、お菓子が準備されている。

図１．子育てひろばの室内

参加の予約は必要なく、開催時間は10:30～14:00までであり、この時間内の出入りは自由で、一家族100円の参加費を支払う。特別なプログラムは存在せず、ひろばで所有する玩具を子どもの興味に合わせて出していく。大きなプラスチック・ケースに、ままごと道具、ミニカー、電池を使って動く玩具等が無造作に入っており、基本的に子どもたちは好きなものを取り出してそれらで遊ぶ。その他に、ブロックやパズル、赤ちゃん人形が買ったままの箱で保管されており、子どもがほしがる場合にはそれらも自由に出して遊ぶことができた。ひろばのスタッフは50～60代の女性が毎回４，５名ほど常駐し、参加する母親に対し適宜話しかけていた。毎回平均して、５～６組の母子の参加が見られた[2]。正午が近づくと、スタッフは母親たちに、昼食をとるように声をかけ始め、母親は子どもと一緒に（または子どもが少しの間母親と離れることが可能であれば一人で）１階のスーパー（生協）へ行き、惣菜コーナーやパン屋、飲料のコーナーで買い物をする。子ども用の食べ物を持参する方もたまにはいたが、多くの母親がスーパーで食事を調達し、ひろばに戻ってテーブル席のスペースで食べた。子ども用の椅子はなく、膝の上に座らせるなどして、子どもも一緒に昼食をとる。その後、子どもたちは再び13時半頃まで遊ぶ。お昼寝をする子がいれば、室内の角に敷かれたベビー布団で寝かせたり、スタッフが母親に代わり抱っこしたりする様子も見られた。

筆者にとって知らない土地での徒歩圏内にあるこのひろばは、月に１度のリフレッシュの場であり、居心地の良い空間でもあった。その理由は何よりもまず、昼を挟んで滞在できる点にあったと言える。その際、スーパーで気兼ねなく惣菜を買えることも楽しみの一つであり、その日の昼は自炊する必要はなく、当日の朝、子どもの食事を準備していく必要もない。当時、子どもたちは０歳と２歳過ぎであったが、パンや茶わん蒸し、たこ焼きなどを買って２歳の子どもには食べさせた[3]。０歳児には授乳したり、赤ちゃん用のせんべいを与えたりすることもあった。顔見知りになった他の親子と一緒に買い出しに行くことも母子ともに楽しい時間であった。

ひろばのもう一つの特徴は、特別なプログラムがないことであり、それが筆者には新鮮であ

1　後にホームページを閲覧したところによると、「生協コープX」では県内19カ所の店舗にて子育てひろばを月に１、２回のペースで開催している。生協コープXに対し、論文掲載の許可を取っていないため、県名は匿名とする。
2　クリスマスが近い時期には、サンタさん（生協の男性職員が扮している）からのお菓子のプレゼントがあるミニ・イベントが開催され、20組程度の参加が見られた。
3　しかし実際に２歳児は遊ぶほうが楽しく、じっと食事をとるようなことは少なかった。他の子どもも同様であり、食事の時間は母親たちが集って話すことのできるひと時でもあった。

った[4]。子どもたちはおもちゃで自由に遊び、片付けの始まる13時半頃になると終わりを惜しんだ。スタッフのうち一人の女性は常に母子の近くにおり、前の月に話した内容から会話を広げるなど、母親たちの輪の中にいることが多かったが、残りのスタッフはテーブル席の方で、スタッフ同士の会話を楽しんでいる様子が多く見られた[5]。しかし毎回必ず、どのスタッフも気さくに声をかけてくださる瞬間はあった。あまり多くは干渉してこないことが気持ちの良い距離感であったのかもしれない。

この経験をもとに、育児休暇中もしくは主婦専業である母親たちが子育てを中心とする生活の中で、自宅から外に出かけることのできる場所は重要なものであると痛感した。そして、学生たちが子育て中の母親の気持ちや子育て家庭の具体的な姿を知るためには、実際に母親とその子どもに触れ合う機会が何よりも意味があり、効果的な学びであると考えるようになった。

2．前年度からの準備状況

こうして職場に復帰後、短大サロンの開催を目指して、2018年度より準備を始めた。具体的には短大校舎２階にある模擬保育室を会場にして、母親（もしくは父親）と子どもが一緒に参加することのできる「サロン」の構想を練った。

2－1．会場

乳幼児を持つ家庭の生活実態を知る目的と、短大サロンを試験的に行う目的で、2018年10月25日、11月15日、11月22日の計３回、筆者の友人やそのまた友人を紹介してもらうというスノーボール形式で参加者を集い、母親たち10名に模擬保育室に子どもとともに集まっていただいた。その際、ゼミ生は二人一組となり、10名それぞれに対し質問紙を用いたインタビュー調査を行った[6]（図２）。

図２．インタビュー中の様子（2018／10／25）

母親たちの意見として、「普段、ママ友同士で子連れで集まることのできる場所（自宅以外）が少ない」（10名中７名）、「大学生のお兄さん、お姉さんが一緒に遊んでくれる場は魅力的」（30代・０歳と２歳の子どもの母親）、「こういう広い場所（模擬保育室）があるなら、保育園の一クラスがまとまって遊びに来ることも可能だと思う」（30代・保育所勤務の母親）といった意見があり、模擬保育室を会場とした「サロン」

4　通常の子育てサロンは、スタッフが最後に手遊びや読み聞かせをしたり、親子で体操をしたりと、何らかのプログラムが準備されていることが多い。この時、子どもは自由遊びを中断することになり、さらにプログラムに興味を示さず動き回る子どもがいる光景もありがちで、その対応に苦労する母親の姿はたびたび目撃される。

5　当時聞いたところによると、スタッフの方々はこの広場に関わって10年以上にもなるとのことで、それぞれに子どもがおり、子どもは就職や結婚の時期にある方が多かった。スタッフ同士もこの時間での再会を楽しんでいる様子に見受けられた。

6　インタビューは母親たちの了承を得て録音し、テープ起こしをして、演習Ⅱ（2019年度後期）の時間内に分析を行った。それを経て、2020年３月４日の教育研究活動発表会にて「乳幼児を持つ母親の生活実態と子育て支援―インタビュー分析を手がかりに」という題目でゼミ所属の２年生が口頭発表を行う予定である（論文化未定）。

には一定の需要があるという実感が得られた。

さらに、ゼミナール活動として継続的に短大サロンを開催する場合、演習Ⅰ・Ⅱの講義時間内に行うことから、外部の親子を招く目的で模擬保育室を使用することを申請し、場合によっては他のゼミナールとの調整を図る必要があることも示唆された。短大サロンの会場の設営は、開催日の前日より行う。そのため、前日の午後から当日の16時まで施設使用の申し出を行うこととした。

参加者のケガや何らかの事故があった時のための保険に関しては、本学ですでに加入している保険が有効であることがわかり、単発型のイベント保険には加入しないという方針をとっている（2019年２月現在）。

２－２．周知方法・範囲

旭川市内の乳幼児を持つ母親たちに、どのように短大サロンの存在を周知していくかということに関しては、いくつかのパターンをシミュレーションした。というのは、どのような方法で、どの程度（範囲）にまで周知を行い、どの程度の受け入れが可能であるかというすべてに関して、手探りでのスタートになったからである。

本ゼミナールではこれまで別の学外活動として読み聞かせを行う際、ツイッター・アカウントを作成し、周知を行ってきた。しかし、読み聞かせのターゲットとなる幼児から小学生くらいまでの子どもを持つ保護者で、ツイッターを見て足を運んでくださるという方はいないに等しかった。その経験に加え、乳幼児を持つ保護者世代はツイッターでもインスタグラムでもなく、フェイスブックのアカウントを多く持っているという感覚から、フェイスブックでの周知に絞っていくこととした。

2019年５月にフェイスブックにて「旭短幼教・佐々木ゼミ」という名のページを作り、このページでゼミナールの活動報告や、短大サロンの開催情報を告知するようにした。さらに、フェイスブック内にある旭川市の子育て情報のグループ（参加人数約2,300人）に筆者が一母親として参加し、そこで本ゼミナールのページ情報を紹介・リンクした。現在では、短大サロンの開催周知と予約の申し込みはフェイスブックの経由が入り口となっている[7]。

さらに、短大サロン専用のチラシを作成し（図３）、2019年度末までの情報を掲載した。今後、半期（６か月分）ごとにチラシを作成し、2020年度からは近隣の児童センター等に配置していただく予定である[8]。

以上のように、短大サロンの周知は今後、フェイスブックを用いたインターネット媒体と、チラシによる紙媒体の二つの方法をとっていく。

図３．短大サロンのチラシ（2019年度）

２－３．備品等

最後に、短大サロンを行うにあたって最低限必要な玩具や備品のリストアップを前年度から行った。短大の模擬保育室は、学生たちが模擬保育等の実技や保育の環境構成を学ぶための教室であり、一定程度の絵本や玩具、楽器などが

7　参加者はゼミのページで開催を知り、フェイスブックのメッセージ機能を使って申し込むパターンが主流である。一度参加した母親とはLINEでつながるようにしており、２回目以降はLINEで申し込みをしていただくパターンが増えてきている。

8　2019年度中は、どの程度の周知でどのくらいの参加希望があるか予想できなかったため、フェイスブックだけで周知を行った。2019年２月現在、ゼミ・ページのフォロワーは107名である。

設置してある。しかし、実際に外部から子どもやその保護者を招くという想定はされておらず、ベビーベッドとその布団類、転倒時のケガ防止になるクッション・マット（ジョイント式32枚）、子ども用のおまる、補助便座[9]を事前に購入した。さらに、玩具としてチェーンリング（ままごとの具材用）、ままごと用の皿、お玉、カップ等（数セットずつ）、ソフトベビー人形（１体）、レゴブロック（２～５才児用、２セット）を事前に購入した[10]。

以上の事前準備には2018年秋から2019年の夏頃まで時間を要した。

チラシの文面には「短大 de 親子サロン」というタイトルをつけ、通称・親子サロンと呼んでいる。「サロン」を名乗るのにあたり、旭川市の子育てサロン情報を集約している子ども相談総合センターに問い合わせを行い、子育てサロンの開催（者）には特に制限がないこと、市の認定を受けるためには一定の条件が必要であること等を確認した。2019年２月現在、市には届け出をしておらず、ゼミナール活動の一環として位置付けている。

３．短大サロンの実際

こうして各方面での条件を整え、初回の開催に至ったのは2019年11月のことであった。サロンの開催時間は10：00～14：00までに設定した。筆者が経験したＸ県の子育てひろばを参考に、お昼を挟んで滞在できることを特徴としている。また、特別なプログラムは持たず、自由遊びの場であることも同様である。以下、短大サロンのこれまで３回の開催に関して、参加者の実態、室内の環境構成、母親の様子と回を追うごとの変化について述べ、それぞれについて考察を加える。

３－１．参加者の実態

参加者の人数や属性に関して表１に示した。初回のみ夫婦での参加（父親の参加者）が見られたものの、それ以外はすべて母親が子どもを一人か二人連れて参加するパターンである。すべての参加者から事前に申し込みがあり、飛び入り参加は今のところない。チラシに大学の住所と電話番号を掲載していたため、これまでに１件、大学（代表）への電話申し込みがあった。

第１回目はフェイスブック経由での参加が８組、筆者の誘いによる参加が２組、別のホームページ[11]経由で開催を知っての参加が１組であった。第２回目は新規参加が３組、リピーターが４組、第３回目は新規参加が７組、リピーターが３組となっている。次月以降の予約は参加中に予約表に記入することでできるようになっているため、リピーターが徐々に増えていっていることになる（ただし、体調不良による当日キャンセルを含む）。また、第３回目のみ、当日の朝（10時を過ぎてからを含む）の申し込み連絡が４件あった。

表１．短大サロンの参加者の状況

	開催日	参加親子	保護者	子ども（年齢構成）	当日キャンセル
第１回	2019／11／7	11組	母11、父１	計13名（０歳２名、１歳８名、２歳３名）	１組
第２回	2020／12／5	７組	母７	計９名（０歳３名、１歳４名、２歳２名）	３組
第３回	2020／２／13	10組	母10	計10名（０歳３名、１歳１名、２歳５名、６歳１名）	３組

9　幼児用のトイレ用品各種は、模擬保育室の外にある大人用トイレの中に毎回設置している。

10　玩具に関しては子どもたちの反応を見て買い足す予定で、開催当初はゼミ室でもともと所有していたものや私物（パズル、マグフォーマー、その他ままごと用のグッズなど）を持ち込み運用している。徐々に増やしていく予定である。事前の購入の際には増山編（2017）、瀧（2018）等を参考にした。

11　旭川市内の子育て情報を集め、ホームページを運営している方が短大サロンの情報をご自身のページで周知してくださり、そこを介しての参加者であった。

どの回も開催告知の段階から定員を示すことはしなかった。結果として毎回（キャンセルを含めると）10～13組の申し込みがあり、学生10名と筆者が常駐している環境においては、対応可能な人数であった。とはいえ第３回目には当日の申し込みが４件あったことを考えると、どこかで定員の人数を想定しておくことがよさそうである。模擬保育室の広さや学生スタッフ数を考慮すると、さしあたり15組程度が受け入れ可能であろう[12]。

加えて、当日の朝に申し込みが相次いだ第３回目の様子から、短大サロンの存在が徐々に浸透しつつあると考えられた。４件とも新規参加者であったため、短大サロンの存在と開催を事前に知っていた母親たちが、当日の朝に条件が整い、急遽参加を決めて連絡をくれたということになる。当日の朝に参加者が増えるかもしれないという状況は学生と共有し、それを見越したうえで前日準備を行う必要がある。

参加した子どもの年齢構成を見ると、０，１，２歳児で占められており、いずれも保育所･幼稚園等に就園前の子どもたちである。こうしたことはあらかじめわかってはいたものの、未満児の発達に合わせた環境構成と玩具の準備が今後も基本となる。

３－２．環境構成

模擬保育室の環境構成は、毎回、筆者も加わり学生主体で話し合い、主に前回の反省を生かしながら決めていく。３回の環境構成図を見比べると（図４～６）、ベビーベッドや床敷きのベビー布団の位置が毎回変化しており、議論にも時間を要している。どこに位置づけることが効果的なのか（乳児が実際に利用するかという点と、利用の際の利便性）が議論の争点である。次に、保護者用テーブル席に関しても、母親が休憩しつつ、子どもの様子を見守りやすい位置を定める必要があり、試行錯誤が繰り返されている。なお、その横の飲み物コーナーには大人用のお茶、コーヒーに加え、子ども用のジュース類を準備している。このサービスは無料で提供している。

遊びのスペースにも目を向けて、各サロン後の反省会の記録を振り返る（各回、反省会の記

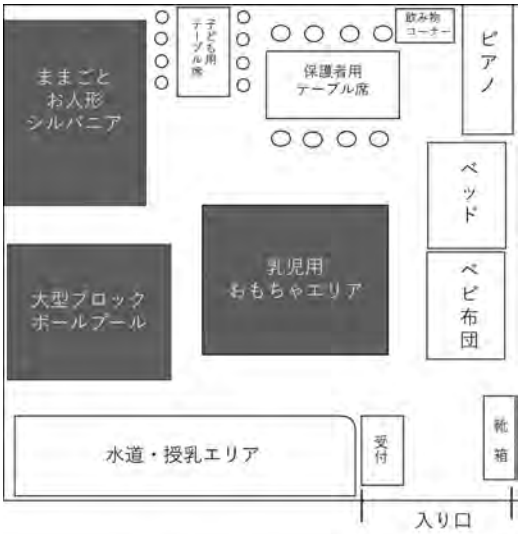

図４．第１回目の環境構成（2019／11／７）

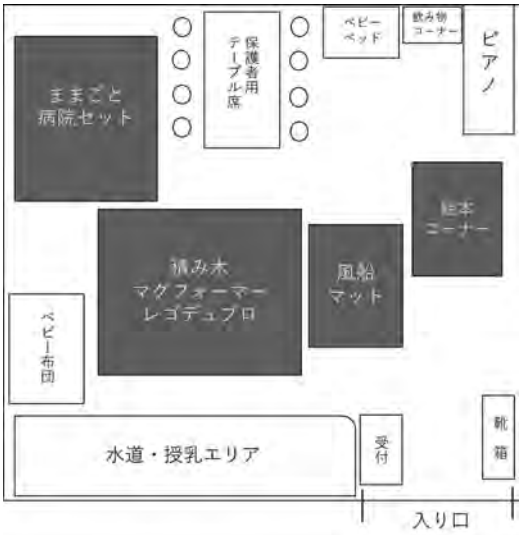

図５．第２回目の環境構成（2019／12／５）

12　きょうだいでの参加も少なくないため、何組と断定することは難しい。また、０歳児の参加も毎回みられるため、その人数によっては受け入れの組数を調整する必要も出てきそうである。

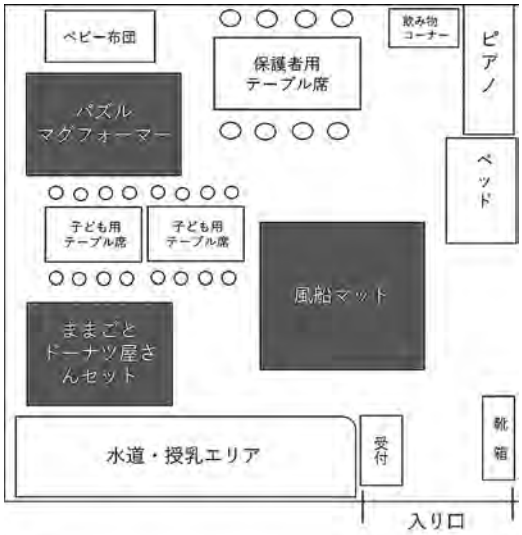

図６．第３回目の環境構成（2020／２／13）

録ノート（学生作成）を参考に抜粋）。

【１回目（２年生主体で準備）】０、１歳児が多く来る予定であったことに備え、入り口すぐの広いエリアに乳児用玩具を準備した。しかし実際には、それらで遊ぶ乳幼児は少なく、ままごとやシルバニア・ファミリーでの人形遊びのほうが魅力的であったのか、人気であった。模擬保育室にもともと備わっていた大型ブロックを組み合わせ、ボールプールを作ったところ、途中から大型ブロックでの囲いが壊れ始めた。その後、大型ブロックを高く積んで遊ぶ保護者が出現し、歩き始めの１歳児も近くにいる中で、やや危険な環境となってしまった（以上、2019 年 11 月７日。図７、８参照）。

【２回目（２年生主体で準備）】ごっこ遊びや構成玩具のコーナーを意識的に準備し、前回よりも玩具の量も豊富であった。また、子どもが乗って遊べる風船マットを作り、試作をしたうえで配置。前回と比べ、子どもの遊びが飽きることなく盛り上がっている様子であった。絵本のコーナーを設けたが、興味を示す子どもはほとんどいなかった。構成玩具近くに配置したベビー布団に乳児が２～３人寝転がる様子もあり、今回の布団の配置は過ごしやすかったようである。ただし、ベビーベッドは保護者席の近

図７．大型ブロック × ボール

図８．シルバニアで遊ぶ２歳児

くにしたものの、ほぼ利用が見られなかった（以上、2019年12月５日。図９、10参照）。

【３回目（１年生が準備）】好きな玩具をテーブルに持ってきて遊ぶことを想定し、各コーナーの真ん中に子ども用のテーブル席を配置したところ、うまく機能していた。しかし、ままごとコーナーのほうに子どもたちが集中しがちであり、今回準備したパズル（24ピース、36ピースの全５種類）には興味を示す子が少なかった。レゴブロックの飛行機、車、電車のパーツが何度か取り合いになったことから、男の子が好む玩具が全体的に人気で、かつ不足していたと思われる。時間の経過に伴い、風船マットでの遊び方が大胆になってきたため[13]、次回以降は準備するか否かという意味も含めて議論が必要。ハイハイとつかまり立ちをする10か月の男児が何でも口に入れる時期であり、あらかじめ危険なものは取り除いていたつもりでも、アイスクリーム屋さんの玩具のアイス部分を口の中に入れてしまっていたことがあった。室内をどの子も自由に動き回れる環境なだけに、常に見守りの必要な子を把握する必要がある（以上、2020年２月13日。図11、12参照）。

以上のように、各回とも前回の反省を生かしながら準備物を決めているものの、前回、子どもたちが喜んでいたから今回もそれを準備するという思考が一部に見られた。また、０～２歳児が混在する室内で、２歳児に向けた玩具は、どんなに吟味していても０歳児にとって危険を伴うことがあり得る。このことは第１回目から慎重に議論を重ねてきたが、今後は玩具の選定だけでなく、室内におけるコーナーの配置やその工夫に関しても議論していく必要があるだ

図９．構成玩具のコーナー

図10．ねんね期の乳児たち

13　風船マットは布団圧縮袋の中に風船を平らに敷き詰め、中の空気を抜いて簡易的なマットにし、座ったり飛び跳ねたりすることのできる学生作の玩具である。しかし非常に軽いため、持ち上げたり振り回して遊ぶ子も出現してしまい、対応に悩む瞬間があった。

図11. 風船マット

図12. マグフォーマーとパズルのエリア

ろう。

ミーティングを含めた準備の時間には限りはあるけれども、今後しばらくは、様々な玩具や遊びの内容を提案し試行する時期であると考える。そのため、新しい環境構成のアイデアを積極的に出し合い、共有・議論する時間は必須であり、引き続き事前のミーティング、環境構成の決定、開催後のミーティングとその記録を通した省察という流れを重視していきたい。

3－3．母親たちの様子と変化

参加する母親たちの様子に関して、各回の記録を以下に掲載する（筆者作成）。

【1回目】開始時間15分前に1組の母子が到着。最初はその1歳男児が人見知りをしていたが、学生が2, 3名近くにおり、男の子は母親に纏わりつきながらも徐々に慣れていく。参加する母親たちには子どもが慣れてきた頃に、コーヒー等を勧める。飲み物とともにテーブル席につく母親、飲み物を子どもの傍に持って行ってじゅうたんスペースのほうで過ごす母親など、それぞれである。昼食を持ってきていない母子も3組おり、2組は昼頃帰宅。大学の購買に買いに行った母親が2名、授乳スペースの利用2名。途中から参加した親子は、14時を過ぎてもなかなか帰ろうとしなかった。14時の終わりの合図が明確ではないため、参加者が空気を読んで帰る形になってしまっている。何かアナウンスがあっても良いのかもしれない。

【2回目】リピーターと新規参加者が混じっており、どの母親たちにも意識的に言葉をかけながら過ごす。子どもの年齢の近い母親たちを結び付けることも何度かあった。ねんね期の乳児の母親たちは子どもの機嫌が良いと、学生に任せ、保護者席で話をしている（学生は乳児のところに留まりがちで、後のミーティングにて話題にする）。母親が乳児の傍に戻ってきたのは、泣いたときと排便をしたときだけであった。ミルクも学生がやらせてもらう。昼頃、1組の親子は昼食がないからと帰る。リピーターは昼食を食べていくとのことで、3組が持参、1組は買いに外出。友達同士で参加している母親たちは、そこでの会話が盛り上がっている様子で、スタッフが入り込める余地はない。結果、途中参加の母親とはほとんど話さずに終わった。

【3回目】午前中は筆者や学生の1人が母親たちに飲み物を進めるも、ほぼ誰も利用せずに、子どもと一緒に遊んでいる。一方、新規参加のある母親は最初から保護者席に座り、ほとんど立ち上がらず、子どもは学生に委ねている。そ

の子どもはハイハイ時期で、一人の学生は付きっ切りで担当する。お昼に帰ったのは１組で、残り９組が昼食をとる形となり、保護者席を増設した。７組が食事持参で、レトルトの離乳食、パン、子ども用のお弁当を準備してきている母親も２組。筆者も混じって話すような雰囲気ではなく、母親たちが全員で話をするような輪ができていた。当日申し込みの２組は購買へ買い物に行き、９組が食事後も14時まで過ごす。購買に行った母親の一人は、お昼で帰ろうと思っていたようだが雰囲気に引きずられたようだ。保護者席で過ごす母親が多く、子どもたちには１人につき学生一人が付いているような状況で、母親たちは会話が盛り上がっている様子（もともと友人同士で来ているグループが二つ）。今日は、お昼以降は母親が子どもの近くにいる姿は少なく、学生に任せる雰囲気が定着していた。

以上、母親たちの様子は毎回違う雰囲気があるものの、回を追うごとに、リピーターも含まれているせいか、母親同士で話し込む姿が増える印象である。母親同士で声をかけ合う姿もよく見られる。そして、リピーターは２回目、３回目になると昼食を準備してくるようになり、終了時間までいるパターンが多くなる。何名かに話を聞くと、ある１歳児の母親は、子どもは昼食後にお昼寝をするスタイルなので、本サロンで昼食をとってすぐに帰宅すると車の中で寝てくれてちょうど良いという。別の２歳児の母親は、子どもの体力がついてきたので、昼食後も14時まで遊びたがるという。普段はお昼寝をしない日もあるが、サロンの日の帰りは車でぐっすり寝るパターンで助かっているということであった。子どもの生活スタイルに合わせ、14時までの開催時間の中でそれぞれの過ごし方ができるのは有効であると考える。ただし、一部の母親たちがフィットする利用の仕方を獲得しているということは、今後、短大サロンのスタイルがフィットしないケースも出てくる可能性があるということであろう。母親たちにとって望ましいサロンのあり方を考え続けていくために、引き続き、きめ細やかに情報収集をしていく必要がある。

４．サロンにおける学生の学び

短大サロンに参加する親子との関わりは、親子双方に接することができるという意味で貴重な学びの場である。学生は通常、学外実習にて子どもたちとの関わりは経験するけれども、その保護者もいる環境下で学ぶという機会は乏しいからである。

第１回目のサロンにて、母親と２歳男児、０歳女児の兄妹で参加した親子を中心とした印象的なエピソードがあった。以下はその記録である。

【エピソード記録（筆者作成）】

２歳男児・Ａくんはどのコーナーにも興味がある様子で、学生とも慣れ、様々な玩具で遊んでいる。母親は女児・Ｂちゃんをほぼ学生に預け、滞在中、一度も授乳もミルクも与えなかった。基本的にはＡくんの行動を目で追っているが、他の母親と談笑しながら過ごしている。Ａくんは途中、学生が注いだオレンジジュースを何度かお代わりをして飲み、サロン全体を謳歌している様子。０歳２カ月のＢちゃんはとても大人しく、学生２名に代わる代わる抱っこされている。一人の学生がしばらくの間Ｂちゃんを抱っこしていると、他の学生がうらやましそうに、何度か取り巻きができていた。

終わりも近づく13時過ぎ、Ａくんがままごと用のお皿２枚にチェーンリングを入れ、お玉で移し替えたりしながら遊んでいた。ちょうど一つのお皿だけに集中していた瞬間に、隣で遊んでいた２歳女児・Ｃちゃんがもう一つのお皿をすっと取ったところ、Ａくんは咄嗟にＣちゃんを手で押し、Ｃちゃんが椅子から転げ落ちて泣いた。泣き声に気づいたＡくんの母親が大きな声で「Ａ！」と名前を呼び、その後もしばらくの間叱り続け、Ａくんも大泣きをする。Ｃちゃんはその母親に抱かれ次第に落ち着きＣちゃんの母親もＡくんの行動には理解を示し、笑いながら慰めている（Ｃちゃんにけがはなかった）。しかし、Ａくんの母親は「毎日悪さばかりして

いて…本当に手がかかって困っている」と落ち込んだ様子で、ちょうどサロン終了の時間にもなり、きまり悪そうに帰っていった。

反省会にて、この時の様子に対し、Ａくんの近くにいた学生が「自分が近くにいたにもかかわらずＡくんの手出しを防ぐことができなかった。咄嗟にそこまで頭が回らなかった」と述べた。この学生は、「自分が近くにいながらすみません」と、この出来事が起きた直後も母親に謝っていた。たしかに、２歳児であるＡくんの発達段階を考慮し、言葉より先に手が出てしまうといった行動をあらかじめ予測することはできたはずであり、学生はその役割を担うべきではあった。しかし、下にきょうだいができたばかりの２歳児の家庭での状況として、急に母親を一人占めできなくなり、さみしさや嫉妬心を普段から抱えている可能性があることも忘れてはならない。そのことを認識していれば、子どもたち個々の発達を考慮すればいいだけでなく、きょうだいで参加するパターンにおいては子どもたちの関係性に対する配慮や、乳幼児二人を育てる母親の日常や子どもへの向き合い方にまで想像力を働かせ、心を寄せていくことができたはずである。

このエピソードを体験し、保育所や幼稚園実習ではなかなか経験することのないきょうだいに対する配慮をゼミナール全体で学び、共有することができた。３回のサロンの様子を見ていても、学生たちはねんね期の赤ちゃんに群がる傾向がある。参加する子どもたちすべてに均等に目配りをするのは言うまでもないが、それでも多数の乳幼児が一緒にいる空間の中では、大人も含め、赤ちゃんに特別なまなざしを向けるような雰囲気があるのは否定できない。サロンの場では、どの子どもたちも等しく歓迎し、確実にすべての子どもの言動を見守り、快適に過ごすことのできる環境づくりを意識しなければならないことを実感させられた事例であった[14]。

５．課題と今後に向けて

以上のように、短大サロンの活動はまだ３回と始まったばかりであり、本報告は準備の内容が厚くなりがちで、これまでを総括して分析できる段階にあるとは言い難い。今のところ、リピートして参加してくださる方や、短大サロンの情報をキャッチして新規に申し込みをしてくださる方が一定数おり、需要の手応えはそれなりにある。しかし 2019 年に実施された旭川市の子育て世帯を対象としたニーズ調査[15]を見ると、市内の子育て支援拠点である「子育てサロン」に関しては、74.8％が認知しているものの、利用したことがあるのは 28.1％である。今後の利用希望も 34.3％とあまり高くはない。同様の傾向にあるのは「育児サークル」で、76.1％が認知、実際に利用したことがあるのは 13.9％、今後の利用希望は 26.4％である。子育て中の母親たちが集うことを目的としたこうした支援拠点は、現在活性化されているとは言い難い状況である。

次年度は本学での短大サロンを継続していく取り組みだけでなく、市内の子育て支援拠点の実態調査を行い、さらには子育て中の母親たちのニーズに関してもインタビュー形式で調査・分析を行う計画である。これらの結果から、現在子育てしている家庭にどのような支援サービスがより快適な形でフィットしていくのか、追究を続けていきたい。

14　なお、Ａくんの母親から次のサロンの申し込みはなかったため、筆者より連絡をし、また遊びに来てほしいと伝えた。他の子どもとのトラブル等があると、次からその子育て支援の場に足が向かなくなることは多々ある。母親には、短大側はＡくんの行動を困ったこととして捉えたわけではなく、むしろ学生たちが多くの学びを得るきっかけになったことも伝え、良ければ今後もぜひ参加してほしいと伝えた。結果、第２回目にも参加してくださっている。

15　旭川市ホームページより、「『旭川市子ども・子育てプラン』（次期計画）に関するニーズ調査　結果報告書」（2019 年３月）を閲覧。就学前児童の保護者に関しては、配布票2,500件、回収票1,154件、有効回収率46.2％とのことである。（https://www.city.asahikawa.hokkaido.jp/kurashi/218/266/269/p004601_d/fil/houkokusyo.pdf）2019年２月25日アクセス。

謝辞

本報告は北海道社会福祉総合基金による助成を受けた成果の一部です。

短大サロンを準備していくのにあたり、2018年度にインタビュー調査に協力してくださった10名のお母様方に感謝いたします。

引用・参考文献

・増山由香里編著（2017）『具材－ごっこ遊びを支える道具』庭プレス
・瀧薫（2018）『保育とおもちゃ～発達の道すじにそったおもちゃの選び方』エイデル研究所
・高山静子（2018）『子育て支援の環境づくり』エイデル研究所
・白井千晶・岡野晶子編著（2009）『子育て支援　制度と現場－よりよい支援への社会学的考察』新泉社
・汐見稔幸編著（2008）『子育て支援の潮流と課題』ぎょうせい